

# わたしに問わなかった者たちに、わたしは尋ねられ わたしを捜さなかった者たちに、見つけられた

第155号

イザヤ 65:1

平成20年8月29日

サムエルが死んだとき、全イスラエルは彼のためにいたみ悲しみ、彼をその町ラマに葬った。サウルは国内から霊媒や口寄せを追い出していた。ペリシテ人が集まって、シュネムに来て陣を敷いたので、サウルは全イスラエルを召集して、ギルボアに陣を敷いた。サウルはペリシテ人の陣営を見て恐れ、その心はひどくわなないた。それで、サウルは主に伺ったが、主が夢によっても、ウリムによっても、預言者によっても答えてくださらなかった。サウルは自分の家来たちに言った。「霊媒をする女を捜して来い。私がその女のところに行って、その女に尋ねてみよう。」…サウルは、変装して身なりを変え…女のところに行き…「サムエルを呼び出してもらいたい。」この女がサムエルを見たとき、大声で叫んだ…王は彼女に言った。「…何が見えるのか…」サウルは、その人がサムエルであることが分かって、地にひれ伏しておじぎをした…サムエルはサウルに言った。「なぜ、私を呼び出して、私を煩わすのか…主はあなたから去り、あなたの敵になられたのに…主は、あなたといっしょにイスラエルをペリシテ人の手に渡される。サムエル記第一 28 : 3-19

天体観測を楽しめる美しい夜空が恐ろしい嵐を呼ぶ黒雲に一変するこの時節、人間の自然との関わりを、神の創造の摂理から考察してみましょう。神は天地創造の四日目に、人間が地上から空を仰いだとき天の万象が見て取れるように、地上を覆っていた大気を整え、それによって地の支配者となる人間が神からの「しるし」を受け、季節や「とき」を知ることができるようにしていただきました。神の御命令「**光る物が天の大空にあって、昼と夜とを区別せよ。しるしのため、季節のため日のため、年のためにあれ。また天の大空で光る物となり、地上を照らせ**」(創世記1:14-15)を、天の星、太陽、月、惑星など天体の天文学的位置関係に、神からのしるしが現れるように神が造られたという意味に捉えることができるなら、主のメッセージや預言の解明に今日の天文学的知識が役立てられるということかもしれません。聖書には、天体の位置関係を描写した箇所が少なからずありますが、ユダヤ人たちは、古来天体を研究し、聖書の記述から現代の天文学的知識に劣らない正確さで月の動きなどを読み取ってきました。たとえば、十六世紀になって初めてコペルニクスが太陰月を 29.53059(92)日と算出したのですが、ユダヤ人たちはすでに十二世紀に 29.53059(86)日と算出しており、人工衛星の観察から今日算出されている 29.530588日とほとんど変わらない正確さの数値を割り出していたのでした。

このように神は人間の益となるように、また、神の御目的のために、天体に美しいデザインを施して下さったのですが、いつの間にか美しい天体の配置が人間の目的のために利用されるようになってしまったのです。今日、天文学と占星術(学)が混同され、あたかも聖書が占星術を認めているかのように、聖書やキリストの教えを信じる者たちの中にも、星占いはじめ、姓名判断、手相占い、茶葉占い、血液型占い、運勢、迷信などに、罪悪感や抵抗感などなく関わったり、あるいは、巻き込まれたりする風潮がありますが、聖書はそのようなこの世の慣わしに染まることを厳しく禁じています。

イスラエルの民が 1446BCE 頃、隷属下にあったエジプトから神のご介入で奇蹟的に連れ出され、荒野で律法を与えられたとき、神が警告されたのは、「**あなたがは…エジプトの地のならわしをまねてはならない…カナン地のならわしをまねてもいけない。彼らの風習に従って歩んではならない。あなたがたは、わたしの定めを行い、わたしのおきてを守り、それに従わなければならない…それを行う人は、それによって生きる**」(レビ記18:3-5)であり、「**墮落して…天に目を上げて、日、月、星の天の万象を見るとき、魅せられてそれらを拝み、それらに仕えないようにしなさい…**」(申命記4:16-19)でした。民がカナンの地に定住して農耕作りに携わるようになると、天候を危ぶむあまり、自然崇拜に陥りやすいことを御存じだった神は、自然は崇拜の対象ではなく、神が全人類の益のために与えられた恵みで、神の定めと掟を守っているかぎり、人間は自然、天の万象に脅かされることなく、神の守りのうちに平安に生き永らえることができることを教えられたのでした。

これは、「**異邦人(神を知らない民)の道を見習うな。天のしるしにおののくな。異邦人がそれらにおののいても**」(エレミヤ書10:2)と、預言者が警告、奨励した神の民、神を信じる者の生き方です。しかし、現実には、イスラエル史は神の御旨とは正反対の、禁じられたことに誘惑され、とりこになるという反逆の歴史でした。エジプトでの隷属、約束の地カナン(今日のパレスチナ)での異邦人の慣わしや偶像崇拜への迎合、アッシリヤはじめ近隣諸国によるしいたげ、バビロン捕囚、ギリシャ思想や哲学の感化を経てイスラエルの民

が世代から世代へと伝えてきたのは、神が忌み嫌われ、禁じられた占星術など異教の風習、霊媒、口寄せ、呪術はじめ、自然崇拜、偶像崇拜が混入した「宗教」だったのです。このように異邦人の風習、偶像崇拜を続けながらイスラエルの神に仕えるという民の矛盾した信仰姿勢がヘブル語聖書に赤裸々に記されているため、ヘブル人の信仰やユダヤ教がバアル神崇拜と何ら変わらないかのような印象を抱いてしまった人もいます。

しかし、全人類の神ヤーウェの絶対的卓越を主張している聖書は、一貫して、偶像、占い、呪術、また、霊媒などを通して呼び出した死人を通しての占いや予言の一切を禁じています。それは神に反逆する霊（汚れた霊、悪霊）と関わることだからです。世の中がすさみ、愛が冷え、恐怖にさらされ、先が見えなくなり、人生に不安を抱くようになると決まってこの世の人々は占い、予言、宗教に走る傾向がありますが、冒頭に引用したサムエル記からのくだりには、まさにそのような状況に追い詰められたサウル王が「霊媒」を通して未来を知ろうとした結果、何が起こったかが記されています。そのような霊的現象をどのように取り扱えばよいのかに関して、この出来事から非常に意義深い洞察を得ることができますので、考察することにしましょう。

サウル王は順風満帆じゅんぷうまんぱんのときには、モーセの掟に従い、国内から、まじないぼくせん、卜占、霊媒による未来占いに携わる者を追い出していたのですが、神への反逆のゆえ、神の御旨が分からず不安に脅えるようになったとき、変装してエン・ドルの霊媒のところに行き、亡くなった預言者サムエルを呼び出してほしいと頼んだのでした。聖書は「霊媒」、あるいは、「霊媒をする者」を、「ある特定の霊と関わることによって、占いする者」と定義しています。用いられているヘブル語用語の“よく通じている近い霊”とは、その霊媒にいつも親密に関わる特定の霊のことで、その霊を通して、占いが行われることを示しています。この霊媒女は、サウルの要求に答えて、自分の特定霊を通して「サムエル」を呼び寄せようとしたのですが、その儀式を始めようとしたとき、突然現れたのがサムエルでした。この女が、果たしてどのような能力を持っていたかには次の三通りの見解が成り立ちます。1. 死人の霊と交わる能力を実際に持っていた 2. そのような能力があると信じ込んでいた 3. 全くのペテン師であった。(2. の「人間がサタン、悪霊にたぶらかされている状態」を聖書は主張)

古代のユダヤ教教師ラビたちや、二世紀のキリスト教会の教父たちの多くは、この場面で、サムエル自身の霊が実際に現れたという見解をとったのですが、サムエルの出現は、悪魔による欺き、妄想であると主張する者たちもいました。この議論はまだまだ続いているのですが、出現したサムエルがだれであったのか、どうして現れたのかに関しては、文脈から次の点が指摘できます。1. サムエルの出現は、主によるもので、魔女や霊媒の業ではなかった 2. エン・ドルの霊媒女は非常に驚き、サムエルが現れてから自分が主導権を握るのではなく、むしろ目撃者の立場に立っていることから、霊媒女の眼前に現れたのは、女がよく知っている、いつもの占いの手段に使う特定霊（悪霊）ではなく、全く別の源からの霊の出現であった 3. サムエルの出現の目的は、神の特別なメッセージをサウル王に告げるためであった

この霊媒女は、イスラエルに占いの禁令を課したサウル王その人が、山の奥深いところで人目を忍んで、霊媒のわざに密かに携わっていた自分の道場に、よもや伺いを立てにこようとは思ってもいなかったもので、まず前もって芝居を打つ準備をすることはできなかったことは明らかです。また、神がサタンに、サウル王の不信仰をとがめるメッセージを語る権威をお許しになることはあり得ないことで、しかも、サウルと息子たちのペリシテ人による殺害の予言の宣告は、もはやサタンの力の及ぶところではなかったのです。

サウルはサムエルの霊が現れたのを自分で見たのではなく、霊を見ることのできた霊媒女が告げた年老いた出現者の特徴ある服装「外套」によって、サムエルであると確信し、サムエルの告げたメッセージは自分の耳で聞くことができたのでした。サムエルがまだ生存中、サウルの失脚を予言したとき着ていたのが、おそらくそのときサムエルが着ていた外套だったのでしょう。したがって、ここでサウル王の前に出現したのは、紛れもなくサムエル自身の霊ということになるのですが、神がそのことを認可されたというのではなく、例外中の例外として、このときにはあえて許されたと解釈するのが、聖書の原則に則っているようです。

聖書には他にも、たとえば、神が背信の王アハズに対して、掟では禁じられているにもかかわらず、例外的に<sup>しるし</sup>をを求めることを許されたことがイザヤ書7章に記されていますが、同様に、「死人の霊を呼び寄せる」という掟で禁じられたことをあえて許す例外を起こされたのは、そのような現象が実際に起こりうること、しかし、特別な神の計らい、目的の下での神ご自身の働き以外のものはすべてサタン、悪霊に起因するものであるから決して関わってはいけないことを、霊の世界に無知な人間に、知らしめるためであったということが考えられます。おそらく、霊媒を通して現れる霊は実際の死人に似せた悪霊の変装で、ここで神がサムエル自身の霊を出現させられたようなことは、人の霊を取り扱うことのできる創造者なる神ご自身以外だれもできないのです。

今日、すでにちまたで横行している多くの霊的な感わしは、終末の時代の特徴であると聖書は警告しています。私たちが霊を正しく見分けることができるよう、神はすでに聖書の中にいろいろな例症を記しておいてくださったのですが、神の掟と定めを守り、主との親密な関係をもつこと以外に悪霊からの守りは無いのです。